



おとぎ話「似本国での政治と金」

これは雲の上のウサギの国、似本国のおとぎ話。地上の話ではありません。

V S 開発公社ともめていた長州産業は政府の辛利氏に泣きついた。

「先生、何とかV S の主張を引つ込めさせて百万ドル払うようにして下さい。勿論、タダでは申しません。一応一割と云う事で」とドドンとドルの札束を渡した。

早速、辛利氏はV S に電話。「長州産業の件だが、V S の主張が通ると思ってるのか？」

担当者は「長州産業の言い分はアマリにも勝手。裁判でも絶対に負けない」と抵抗。

辛利氏は秘書に云った「大統領に札束の半分を持って行け。お前が机にしまっておいたが誘惑に負けて、つい

使ってしまったことにする。暫く月で餅を搗いてろ」

大統領からの電話を受けたV S の会長は汗水タラタラ。「はい、そのような変わった法律解釈は分かりません。いや、よく分かりました」と。

会長は、すぐに担当者呼んだ。「普通の弁護士はお前の言い分が正しいと云うだろう。が、我が社の解釈はこうなった」

「え？どうして？裁判でも負けないと云ったでしょう？」

「いや、これが正しい解釈だ」

議会に呼ばれても「こういう解釈にしたのは大統領や辛利氏の圧力ではありません。はい」

これは似本国の話。日本ではありません。みなさんはどう思われますか？

辺野古

沖縄県名護市辺野古
二〇一六年一月



潮が引き、干潟が広がっている。この絵を描いた頃は大潮。朝の満潮から比べると、昼過ぎの干潮では潮位が1m以上も下がる。

辺野古漁港の防波堤に立つと、二つの大きな山が見える。左が標高三三五mの久志岳。この久志岳の東側は米軍海兵隊の実弾射撃演習場。連日砲弾が撃ち込まれている。打ち込まれる度にドドンと響く。右が標高三三二mの辺野古岳。

辺野古など三区では新基地に条件付賛成となった。しかし、辺野古地域の住民全てが賛成した訳ではない。辺野古とその周辺の地域で「海上基地建設阻止」として座り込みが一九九七年に始まった。その座り込みのテントが久志岳の手前の海岸に見える。既に十九年に及んでいる。